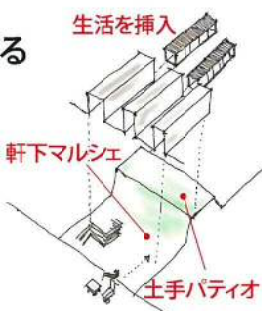


# 海と山のめぐみを活かし、住む、育てる、働く、発信する拠点をつくる

## 大きな軒と大地が作る美浜スタイル

美浜を持つ海辺と里山という異なる地形の組み合わせに呼応して、まちに開かれた平坦な場所と土手を組み合わせ、小さな地形をつくり出し、この地での生活を丁寧に挿入した新しいまちを提案します。ここが美浜における生活スタイルのモデルとして、発信拠点となります。

凸凹の形状を持つフレームの片方を人工の土手に載せることにより、浮遊したフレームは大地であり大きな軒となります。軒の下では、美浜にある農と海の資源を最大限活かすため、それを支え、ここを訪れるきっかけとなる、さらにここから発信していくことのできる拠点となるべく、まちに開かれた柱廊空間を提案します。これを軒下マルシェと名付けます。さらに、大地の上には生活の場としての内部空間と、土手の上において、新しい住まい手、子育て世代、老人世代など多様な生活を支える親密な助け合いに囲まれた共有空間を提案します。これを土手パティオと名付けます。



### 01 美浜の特徴を活かしたまちづくり

海や里山への観光、知多半島を巡遊する道をサイクリストが通過していきます。海では潮干狩り、漁業や魚釣り、里山では野菜づくり、みかん狩りなどの資源があります。これらを活かすために、この団地をまちの拠点として計画します。祭りや山車、花火、隣組や女性会などの地域住民のつながりを、出産、子育て、教育の支援にも活かして、休耕地や未利用地、竹の利用なども積極的に取り入れて、若年層や子育て世代、転入者にも住みたいまちになるような仕組みを提案します。

### 02 コミュニティ形成について

軒下マルシェは、駐車スペースであると同時に、可変的なしつらえや可換的な装置によって美浜地区の広範囲に渡るコミュニティの形成の発信基地として寄与します。土手パティオは、各住戸に囲まれた共有のお庭空間、各住戸の入り口と軒下空間、そして内部の土間空間までを含めた場所からなり、様々なタイプの住人が助け合うスペースとして親密なコミュニティを形成します。

### 03 市民参加の設計プロセスについて

合意形成のためのワークショップの前に、まず、ここで始まる生活スタイルを抽出し具体的な仕組みに落とし込んでいくためのワークショップを行います。町民を海や里山、農や漁業、女性や子育て、観光、発信、経済など多岐にわたる活動ごとにチームづくりを行い、ファシリテーターは美浜地区のプランニングを行います。ここに人が住むとはどういうことか、どういった拠点としていく必要があるのかを実際の場所づくりを前提にまとめていきます。

### 04 木の活かし方について

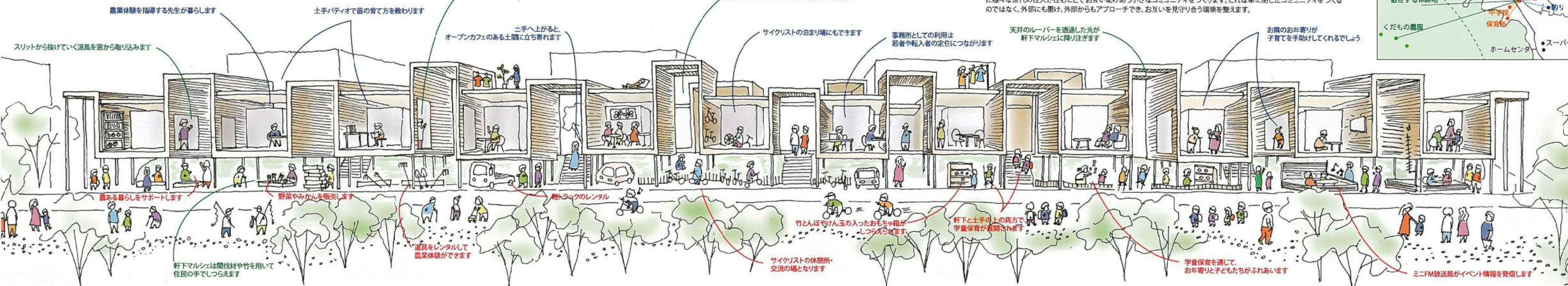
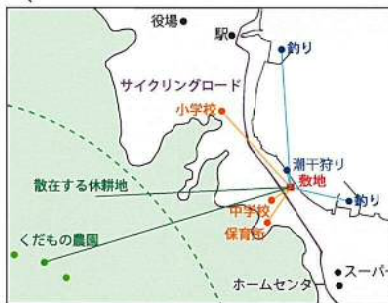
愛知県産の県有林は定期的な伐採の必要があります。そのヒノキ材や杉材を素材として使用します。住戸ユニットは木造として地域の技術を活用して作られ、インフラとしての凸凹フレーム（鉄骨造）に取り付けられます。間伐材や竹は、可変的なしつらえや可換的な装置としてのアクティブツールに用います。

### 05 気候・風土を活かした設備システム

軒下と土手は微気候を作り出すシステムでもあります。もともここには海からの風が吹いています。それを活かす住棟配置としました。町家を風が抜けるように、開口部からの通風と、スリット部分からの通風を意図しました。

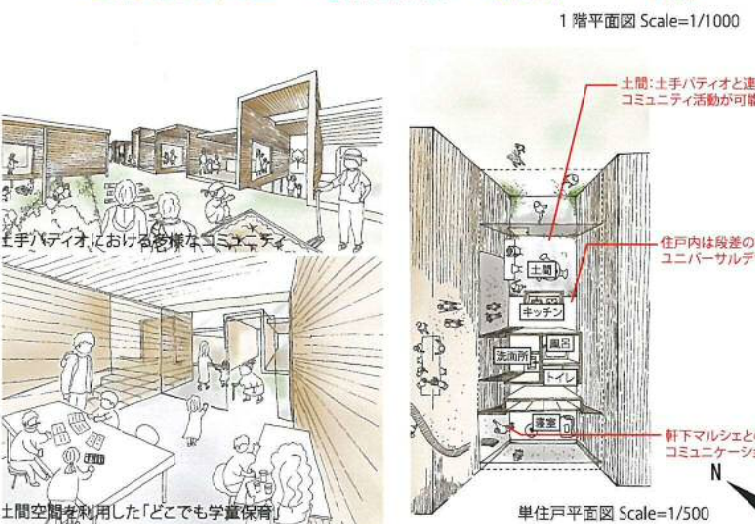
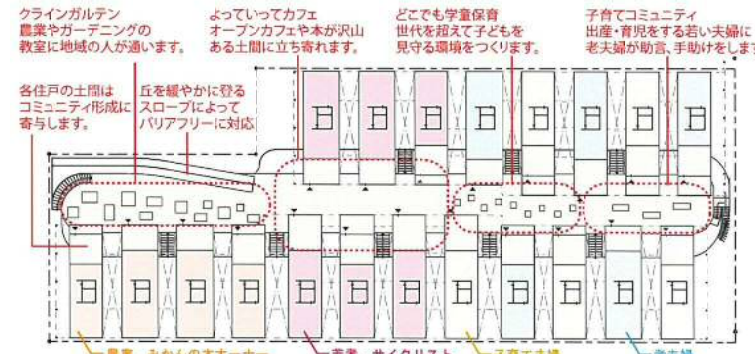


美浜町で豊富にみられる竹林

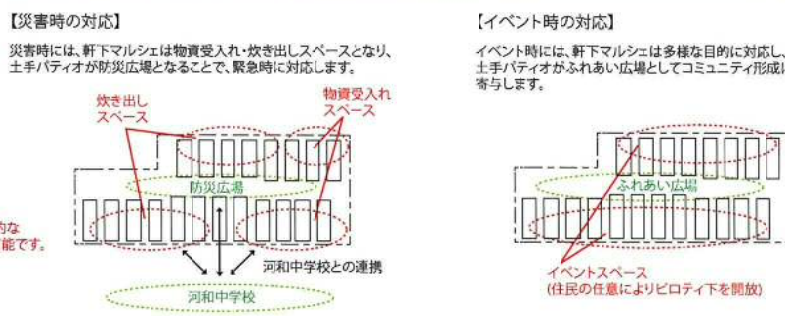
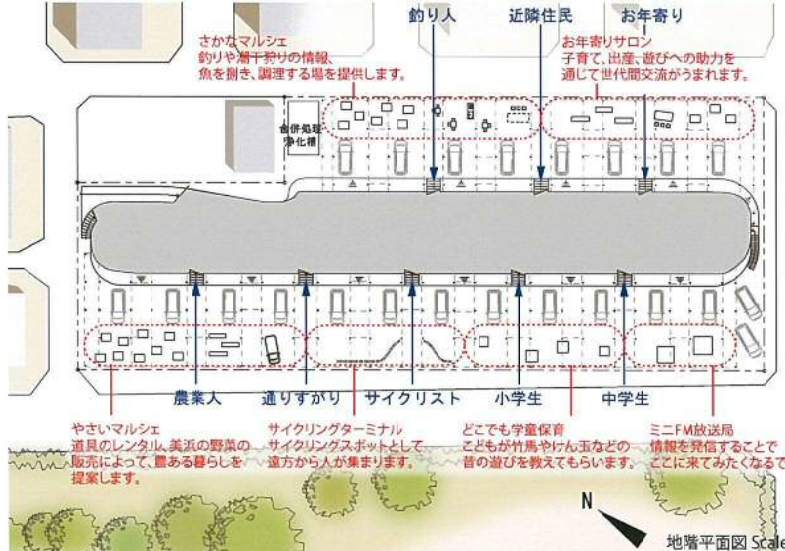


### 02.コミュニティ形成について

土手パティオは、土手を駆け上ると各住戸の入り口に囲まれている、といった空間です。軒下マルシェから滑り上がったコミュニティの礎をより豊かに熟成させる場所です。農業体験で指導する住人がパティオで苗を育てており、来訪者がより深く学ぶきっかけとなります。農業体験で動物を飼った人は一緒に魚をさばって食事会に参加します。釣り仲間はずっと打ち明けて朝まで語り明かすでしょう。サイクリストの家はゆっくり休んでいくために住戸を開放することもあります。子どもを育てる家庭がいくつか集まれば、交代で子どもを見ることもできます。どこでも学童が始まります。お互いに土間空間を開放して、母親同士はランチ会を始め、子どもたちは各自遊び回る。大きななれがあれば一緒に宿題をすることもできます。こころ、子ども産むことに親戚を感じることはありません。すぐに子育ての先輩もいますし、お年寄りが子育ての先輩を聞かされてくれますから自分一人で思い悩むことはありません。

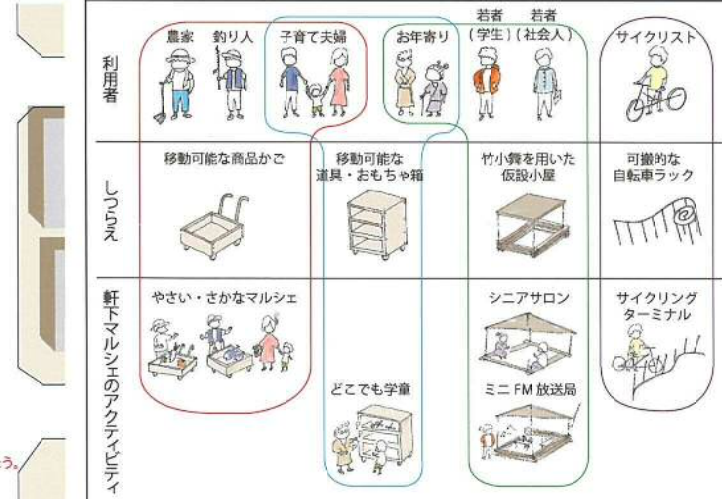


軒下マルシェは、適度な日陰と風を生む良好な外部空間で、定期的に企画が実施されます。農業企画：農業体験する来訪者がここで道具をレンタルし指導を受けます。野菜やみかん販売、オーナー制度の案内や受付を行うブースもあり、農ある暮らしの提案とサポートをする拠点となります。漁業企画：釣りや潮干狩りをサポートするスペースや道具を貸し出すスペース、朝採れた魚や貝を売る市場が開かれます。どこでも学童：土手を上ったりけん玉や竹馬など、子どもたちが公園とは少し違う空間で遊べる場所を提供します。お年寄りサロン：涼しい風が吹く軒下マルシェには縁台に座って会話を楽しむお年寄りの姿があります。土手を越えれば学童に顔を上げて遊びを子どもたちに教えることもできます。子どもたちとふれあうことでお年寄りも元気になる。ミニFM放送局：これらの企画の開催日や当日の様子、予告等をラジオを通して発信します。サイクリングターミナル：サイクリングコースを走るサイクリストがFMの情報を聞きつけて訪れます。ロードバイクをスタンドに固定してしばしの休憩を取ります。ここには自転車のパーツやサイクリストの住人も住んでいて交流が始まります。

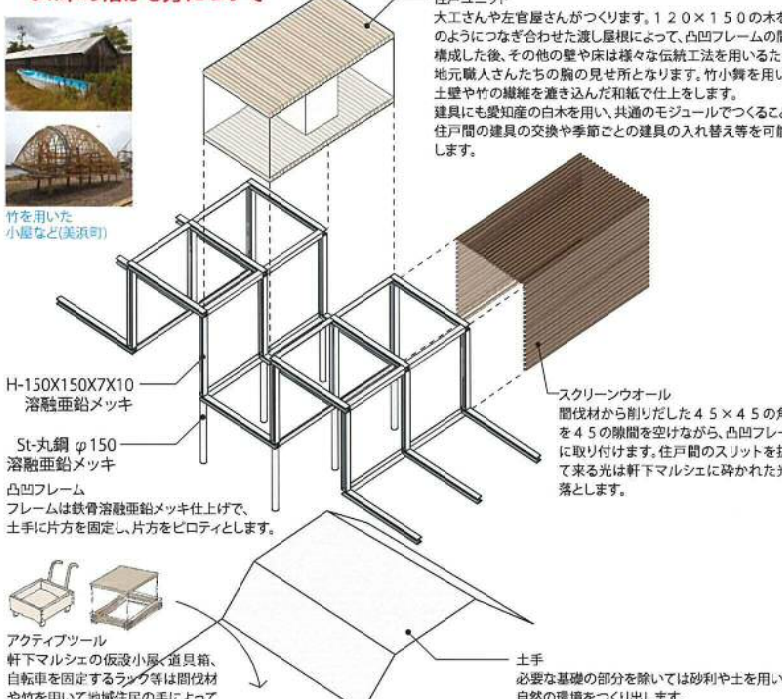


### 03.市民参加の設計プロセスについて

町民のモチベーションを保つためにも、土壁づくり、建具づくりや竹を用いた道具づくりを行い、各活動のチーム主催で農業体験、漁業体験、サイクリングなど、ここで考えていく活動を実際企画として行って広告を兼ねて検証します。この町営団地がオープンすると、住人主体の劇場空間が展開し、自らが愛する町営団地となります。こうしたワークショップを通して、ただ行政が与えた団地に住むだけでなく、活動に参加し支え合うことを学び、主体的にここに住み運営していく準備をする大切な期間として捉えています。



### 04.木の活かし方について



### 05.気候・風土を活かした設備システム

